

第1回北海道開発の将来展望に関する有識者懇談会 議事要旨

1. 日時:平成 25 年 11 月 29 日(金) 16:00~18:00
2. 場所:中央合同庁舎第2号館共用会議室3A・3B
3. 出席者:[委員]田村座長、石田委員、上村委員、小磯委員、高橋委員、千葉委員、中嶋委員、林委員、古屋委員、山崎委員
[オブザーバー]北海道、北海道経済連合会、北海道商工会議所連合会
[国土交通省]関北海道局長、岡部審議官 他

4. 議事次第

- (1) 開会
- (2) 議事
有識者懇談会について
将来展望と課題について
今後の進め方について
- (3) 閉会

5. 議事及び主な発言内容

資料について事務局から説明が行われた後、以下の論点についてフリーディスカッションを行った。

【主な意見】

(長期展望(2050 年頃まで)を見据えた場合、我が国の課題解決に貢献する北海道の役割や将来像は、どのようなものか。)

- ・ 北海道だけではなく、日本の各地が国際物流について考えている中で、地政学的観点から北海道の強みは何か考える必要がある。中国から北米への輸送船のコンテナは、帰りは空である。このオペレーションセンターを北海道で展開することが考えられる。多くの空コンテナを置けるスペースがあり、経路の途中である北海道のまねを他の地域はなかなかできないだろう。
- ・ シベリアランドブリッジとチャイナランドブリッジについての動向に着目する必要がある。
- ・ 人口が減少して国力が縮小するというような暗い話は国民も聞き飽きている。縮小均衡論に落ち込むことなく、北海道でさえ明るい未来が開けるといふ未来志向の将来像を打ち出すのがこの懇談会の役割だ。
- ・ 地域ブランドとしての北海道はダントツ1位である。広大な大地、美しい景観、冷涼な気候等、これらを経済力に結びつけるための知恵が今求められている。
- ・ 備蓄基地としての北海道の役割を打ち出せないか。
- ・ オランダのフードバレーのように、全産業を挙げて横断的に取り組めないか。

- ・ 電力だけでなく、暖房エネルギー源としてエネルギーの地産地消を考える必要がある。
- ・ これまでの7期にわたる北海道開発の役割、成果は何だったのかを整理することにより見えてくるものがあるのではないか。
- ・ 成長するアジアに近い我が国は、欧米より有利である。さらに、アジア・ヨーロッパ・アメリカを結びつける航空路を含めた国際交通網については、アジアの北に位置する北海道の優位性がある。
- ・ その意味で北方圏構想の取組が今こそ重要ではないか。道内の体制が弱くなっているのが残念。
- ・ TPPがどういう決着になるかわからないが、我が国の食料自給率を維持・向上させる上で、北海道が中心的な役割を担うことは変わらない。
- ・ 自給率を維持・向上させる上で、米と畜産に課題がある。産業用の米を国産で確保することと、自給飼料を増やすことである。これについて北海道には大きな役割がある。
- ・ 農業や食のイノベーションを起こすための投資が求められている。
- ・ 北海道の農産物は他地域で加工されることが多く、付加価値が道外に逃げている。それを引きつけるためには、ロジスティクスの改善、加工のさらなる高度化が必要。
- ・ 持続的な漁業を行っていく上で、生産から流通までの基盤が重要である。また、人づくりが重要である。
- ・ シーニックバイウェイやマリナビジョンの推進は、地域づくりや人づくりに大きく貢献している。こうしたことが、地域の産業にも活力をもたらす。
- ・ 高品質製品の貯蔵など、冷却することを必要とする産業がある。広さや寒さなどのネガティブな要因が、ポジティブな特性と成り得る。
- ・ 2050年までに首都直下型地震や東南海地震も起きるだろうと考えると、北海道はバックアップ拠点に成り得る。
- ・ 北海道は国際化が遅れている。大学に留学生を呼び込もうとしているが、外国人を受け入れようとする、ものすごい事務手続きが必要になる。新千歳空港までに成田空港で乗り継がなければならないというのもネックであり、トータルに国際化を考えていく必要がある。
- ・ 北海道開発に関心を持つ留学生が増加傾向にある。情報発信の工夫によって、国内他地域とは違った魅力をPRできるのではないか。
- ・ ITSなど交通に関するイノベーションが期待されるため、広域分散であることは必ずしも弱みではない。災害で全体がやられることがないという利点がある。
- ・ 北海道の住みやすさを強みにするためには、雇用の場があることが重要である。
- ・ 我が国への貢献として、食、観光、エネルギー、バックアップ拠点の提供が考えられる。
- ・ 北に位置していることと、人づくりについては重要なキーワードである。
- ・ 再生可能エネルギーについては、バイオマスなどの取組もある。こうしたエネルギーの地産地消には、地域の人と同じ方向を向いて連携することが重要である。しかしながら今は、例えば、さっぽろ雪まつりには地元の人があまり行かないということにつながるかもしれないが、地元のために同じ方向を向くということは難しい時代と言えるかもしれない。人づくり

や連携・協働について議論してもいいのではないか。

- ・ 国土強靱化の議論が進んでいるところであり、防災についての道民の意識向上に加えて、大きな災害が起こってからではじめて対策が打たれるという現状を早くどうにかしてほしい。
- ・ 北海道はようやく、インフラを使っていけるという環境に入る。インフラの使い方を議論する必要がある。
- ・ 女性・若い人・高齢者の活用が重要である。
- ・ 経済界から見た北海道の成長戦略について検討を進めており、その結果を懇談会に提供したい。
- ・ 計画を考えるうえで、現場のリアリティやスピード感をどんどん取り込んで実施していくという観点が必要である。

(これまでの北海道開発を踏まえつつ、北海道の強み、弱みは今改めて何か。長期展望を見据え、どう活かし、また克服すべきか。)

- ・ 世界経済を引っ張る成長センターとなるような都市については民間が主導すればよいのかもしれないが、それ以外について計画していく必要がある。
- ・ 同じ区域に国の機関と道県が存在する北海道と沖縄は行政システムも特徴的であるが、この経験がモデルとなるのではないか。自分は国がもっと自信を持って良いと思っており、今般成立した交通政策基本法では国が計画を定めることになっているが、地方にも義務付けをし、その際の国の役割を考えるべき。高齢化するインフラ対策についても、地方では技術職員が少ないという現状を踏まえ、北海道から新しいモデルができれば良い。
- ・ 連携が成立するには、個が確立している必要がある。
- ・ 最大の再生可能エネルギーは水力であり、水力発電の能力をさらに高めることを考えるべきではないか。
- ・ 首都圏への一極集中はリスクであり、国の機能が停止する可能性がある。リスク分散を考える上では、遠隔性や広域分散や寒冷であるこれまで不利であった地域条件に優位性が生まれてくる。
- ・ アクサ生命の立地に代表されるように、民間企業、特に外資系企業においてリスク分散の動きが出ている。外資系企業は、東京だけに拠点を置いていることに危機感を抱いている。
- ・ Facebook や Google による北欧へのデータセンターの立地が進んでおり、寒冷地であることは企業立地に優位である。
- ・ 寒冷な気候を活かし、食料備蓄拠点や、高付加価値製品のストックポイントをつくっていく。そのことが東京との間の物流における片荷を解消し、物流コストの削減にもつながる。
- ・ これまでの計画には肝心なものが抜けていた。誰が行い、誰のためにサービスを展開するのかというようなマネジメントの部分が計画されていなかった。持続的な組織体制が必要であるが、これには民間企業が入らないといけない。

- ・ 日本国民は心のゆたかさを求めており、北海道では心のゆたかな暮らしができる。
- ・ イタリアではアグリツーリズムなどの取組により田舎で経済循環がうまくいっており、北海道でも、「わが村は美しく運動」などに知見を取り込んでいく必要がある。
- ・ 北海道の景観は人材も惹きつけている。当別町では商社マンが景観に惹かれて移り住み、3年後に町長になった。美しい景観を守っていくことが必要である。
- ・ 地域づくりに小さな子供も巻き込んでいくことが必要である。
- ・ 物流は北海道の最大のネックであり、HOPのような取組の一層の強化が必要である。
- ・ 農業では、厳しい作業環境を嫌がって、雇用したくても人が来ないという問題が生じている。このため、徹底した省力化を図っていかなければならない。
- ・ 農業の大規模化により農家が少なくなるため、コミュニティが守れなくなることが危惧されている。
- ・ 人が生き生きとして産業活動を行い、生活をし、地域に誇りを持つことが重要であり、そうでないと観光客も訪れない。
- ・ 都市がコンパクトシティとなったとき、残された農村はどうなるのか考えていく必要がある。
- ・ 水産資源や漁場の変化により、水揚げの場所が変わっても、加工場は簡単に移転できないため、水揚げした水産物を道内で輸送することが必要になる。道内における海と陸の物流ネットワークの構築が重要である。
- ・ 基盤整備については個別にばらばらに行うのではなく、地域において柔軟に実行できることが必要である。
- ・ 北海道に関する身近なことについての知識が浸透していない現状があり、学生の教育が必要である。
- ・ 自立した地域が分散している状態が、災害に対するレジリエンスの観点から理想像となるだろう。
- ・ 越後雪かき道場という取組を実践しており、都会から多くの参加者がいる。特別豪雪地帯は日本の中では少なく、むしろ多くの人が雪国に憧れている。外の視点から見る必要がある。
- ・ 高齢化が10年先に進んでいるということ、10年先には抜け出せると捉えた方がよい。苦しい時期にどう戦ったかによって、次のタイミングの時には一歩リードしている。
- ・ 出生率が1.26と低いのは北海道の弱みである。全国に先駆けて北海道がまずはV字回復することが必要ではないか。
- ・ 中国は将来食料輸入国となることが確実で、北海道産の食料が売れる時代が来る。
- ・ 情報産業が北に向かっているという話があったが、新しい産業には何が必要で、北海道が強みを生かせるのかということを考える必要がある。
- ・ どんなに支援を手厚くしても、人が住まない集落が出てくるだろう。本音ベースで国土の保全や環境の管理について議論していかないといけない。
- ・ 人は基本的に移動する生き物であり、いかに人を安全に移動させるのかが重要である。交通に関する技術も進歩するが、冬の移動はまだ当分困難なままであろう。冬の交通対策

を真剣に考えるべきであり、そうでなければ地域のマイナスイメージが払拭できず、移住者も増えない。

- ・ 実際に民の力が動き出すためには、ここでの議論をどう民間企業や道民に伝えていくのか考えていく必要がある。
 - ・ 雪をうらやましいと思っている人がいるという話を聞き、認識を新たにした。
 - ・ 九州などに対し、自動車で輸送が完結しないというのが弱みだが、トンネルを掘るという話にならないだろうから、既存のインフラでどう解決するのか(港湾の活用など)を考えていくことが重要である。
 - ・ 地域おこし協力隊の定着率は7割だという。
 - ・ 社会保障費の問題がどうなるのか。すでに現在の社会保障制度を維持することが無理になりつつある。
 - ・ 成長や稼ぐためには何が必要なのか、北海道で新しい稼ぎ方のモデルとして何をすることができるのか問われている。
 - ・ 国の別の調査で北海道では多くの場所が無人となるという予測をしているが、もっと住民の気持ちにより添った北海道ならではのデータができないのか。
- ・ 次回は、上村委員、高橋委員、中嶋委員にプレゼンテーションをお願いしたい。

(以上)

(速報のため、事後修正の可能性があります。)